



Dialogue

Creating the Next 60 Years

『記念事業実施報告書』

2014年11月29日

シンポジウム

「ICUにおける英語教育 ―グローバル人材を育てる教授法と学生の体験―」



献学60周年記念事業 国際基督教大学

文部科学省事業『スーパーグローバル大学等事業経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援』
協力：公益財団法人日本英語検定協会



シンポジウム「ICUにおける英語教育 ―グローバル人材を育てる教授法と学生の体験―」

2014年11月29日、東ヶ崎記念ダイアログハウスにて、シンポジウム「ICUにおける英語教育 ―グローバル人材を育てる教授法と学生の体験―」が開催されました。その内容を紹介します。



プレゼンテーション 1

ELAの概要説明／岩田 祐子 ELA主任／教授

ICUのキャンパスは、日本語と英語の両方が使用される「バイリンガルコミュニティ」です。会議や公的な文書は日本語と英語の両方が用いられ、教員の34%が外国籍で英語を用いた講義も数多くあります。そのようなバイリンガルコミュニティに参加するために必要な英語力を習得するためのプログラムがELA (English for Liberal Arts) です。英語で行われる授業の内容を理解し、レポートや論文を英語で書く力、英語でディスカッションやプレゼンテーションをする力を養います。「4年間の学びを達成するために必要なアカデミックな英語力を身につけること」「リベラルアーツを学ぶために必要な批判的思考能力（クリティカルシンキング）や論理的思考能力を『英語を通して』身につけること」の二つを目的にしています。

ELAの特長は「少人数教育」「アカデミックな英語力の習得」「批判的思考能力（クリティカルシンキングスキル）の習得」「学際的なトピック」「ストリーミング」「集中的な学習」「個人指導（チュートリアル）の実施」「すべての授業を英語で行う」などにまとめられます。

学生は入学時に英語の習熟度別にクラス分け（ストリーミング）されます。入学時に実施されるプレースメントテストのスコア、入試の成績、英語圏・非英語圏での経験の有無、アカデミックな論文を書いた経験の有無、インタビューなどの結果を考慮して決定します。Stream（課程）は1から4まであり、それぞれに英語の学習量が異なります。ただし、いずれのStreamもELAの仕上げ科目としてResearch Writing（英語による論文作成）を履修します。学生の一週間のスケジュールは、たとえばStream3の場合、1週間で英語の授業が10コマあり、それぞれに予習・復習、課題がありますから、ほぼ一週間「英語漬け」の生活を送ることになります。

ELAの授業には、アカデミックな論文を読み、ディスカッション等を行うARW（Academic Reading & Writing：週3回）、論文の精読を行うRCA（Reading & Content Analysis：週2回）、論文を仕上げることを目的にしたELAの最終科目Research Writing（週3回）というコア科目があり、それぞれの科目に授業以外に学生一人ひとりに適した指導を行うチュートリアルが実施されます。また、ARWやRCAで学際的なトピックを扱うため、それについての理解を深めるためにLLA（Lectures for Liberal Arts）という英語の講義が週一回行われます。学習に必要なスキルを養うAS（Academic Skills）も設置しています。なお、コア科目は専任教員が担当しています。ELAで学んだことは2年次以降の学習にも生かされています。ELAでは複数の学際的なトピックを扱うこともあり、ELAで学んだ経験が専攻（メジャー）の決定に生かされているようです。

ELA の成果はバイリンガルコミュニティに必要な英語力や批判的分析力を学生がいかに習得したか、3年次の交換留学生数、英語開講科目の履修人数、英語で卒論を書く学生数（現在約3割）、卒業後の就職や大学院進学者数などに表れていると思います。

一方、今後の課題として「多様な学生のニーズ、求められる英語力および社会情勢の変化にどう対応するか」「学生の伸びをどう測定するか」が挙げられます。プログラムの内容を変化させるとともに、短期的・長期的な評価を行い、教育の内容を検討していくことが必要だと考えています。



プレゼンテーション 2

Reading をどのように教えているか／渡辺 敦子 ELA 課程准教授

ICU の英語教育を語ると、よく「英語が得意な学生が集う ICU だからできる」と言われます。しかし成果を上げているのは「ICU だから」ではありません。学生一人ひとりの努力と教員の工夫によるものだと考えています。

Reading の科目は、日本語母語教員が指導し「精読」を行う RCA (Reading & Content Analysis) と、非日本語母語教員が担当し「多読」を

行う ARW (Academic Reading & Writing) の 2 つあります。目的は英文を読むことのみならず学習能力を身につけること。ここで言う学習能力とは「正確な理解能力」「批判的思考能力」「学問探究能力」「自己表現能力」「問題解決能力」を指します。精読の RCA では意味と論理を正確に把握し、客観的事実を確認。テキストのジャンル・構成・論調・社会的文化的文脈を分析する力を養います。一方、多読の ARW では自己表現力（論文作成・討論）の向上、批判的思考力の習得を目指しています。それぞれのシラバスには、ELA Reader（教材）を「読む前」「読んでいる時」「読んだ後」に何を学び、どのような力を身につけるかを明記しています。

ELA Reader（教材）は、さまざまな分野から「どのようなテーマ、トピック、読み物が最適か」を考慮して編纂しています。たとえば春学期のテーマは「発見」で、そのテーマのもと「教育」「文学」をトピックに批判的思考力—「教員が言ったことでも鵜呑みにせず、自分で考えることが学習である」というメッセージを込めたものを読んでもらいます。秋学期のテーマは「内観」で、「異文化」のトピックではアメリカ人学者が書いた日本人の非言語コミュニケーションに関する論文を読み、自分たちが当たり前だと思っていることを他文化の人がどのように感じたかを学ぶとともに、「人種」のトピックでは「人種」とは科学的な区分ではなく便宜的な範疇に過ぎないことを理解し、自己を再定義する機会を持ちます。そして冬学期は「自己発信」のテーマのもと「生命倫理」のトピックで自分の意見を考え、そして、「将来へのビジョン」のトピックで「人間の安全保障」という論文を読み、国家と人間の安全保障は何が違うのかを考え、責任ある地球市民として自分の身の回りだけではなく、地球の裏側で苦しんでいる人たちにも責任を持つことを学びます。さらに「将来戦争を起こさない（恒久平和）」という気持ちを自分自身の心に刻み込んでもらうことを目指しています。

リーディングの学習活動では必ずディスカッションを行い、あるトピックに対して自分はどう考えるかを発表します。毎時間のように自分の意見を述べる機会があるため、学生達は自分

を表現することに慣れてきます。また、グループディスカッションでは役割分担の重要性、役割分担の方法を学びます。さらにグループディスカッションを通して、自分とは異なる意見を持つ人がいることを知り、多元的視野を培養するとともに、複数の意見をまとめる作業を通して「問題解決能力」の習得も目指します。

また、「Who said (著者)」「What (メッセージ)」「To whom (読者対象)」「For what (目的)」という学習活動では、著者、対象、目的によってメッセージが変わるということ、テキストの内容を著者の背景や読者層、目的を含めて理解するように指導しています。



プレゼンテーション 3

Writing をどのように教えているか／渡邊（金）泉 ELA 専任講師

文献の検索から分析・解釈、講義、ディスカッションなど、学術活動のプロセスを「英語で」学ぶのが ELA です。ELA では英語の習得と批判的思考力を養うための学習活動を同時に行っていますが、この活動の最終アウトプットが論文にあたります。つまり論文作成能力を身につけることがリベラルアーツ教育に不可欠といえます。

ライティング科目の ARW (Academic Reading & Writing) は、全員が履修します。英語が堪能な帰国生も例外ではありません。ほとんどの学生は ICU に入学するまで学術論文に触れたことは、まずありません。「作文でなく、要約でもなく、客観的な根拠をもとに可能な限り客観的・論理的にアカデミックな言葉」で主張を論じる「アカデミックライティング」について基礎から学んでいきます。

アカデミックライティングとは学者間のコミュニケーション手段。ここで言う学者とは学問に携わる学生も含みます。研究成果や自分の意見を発信するものであり、そのような文章を書くことは考えることにつながっています。自分の意見を小論文にまとめるという作業を繰り返し行うことにより、次第に長い文章が英語でも書けるようになります。

アカデミックライティングの学習は、まずパラグラフ・ライティングからスタートします。この時点のテーマは「なぜ大学に入学したのか」など、学生にとって身近で考えやすいものになっています。テキストや資料等で読んだ文章を自分の言葉に書き換える作業を通してその事柄に対する理解を深めます。そして複数回チュートリアルを行いながら、自分の意見をまとめ、短い文章にしていきます。

次に行うのが 5 パラグラフのエッセイの執筆です。「結論があつて、それをサポートする解説がある」という英語でのライティングの構成を徹底して学びます。読み手に推察する余地を与えないこと、人に読んでもらえるものにするのが重要です。

自分の主張を補強するのが参考データやその分野で権威がある研究者の言葉、先行研究などです。膨大な資料の中からふさわしいものを取捨選択するには、批判的思考能力が必要です。そして何をどのように取り入れるのかだけでなく、剽窃と引用の違い、引用のルールなども徹底して学びます。

こうやって書いてきた論文の下書きを多くの人に読んでもらい、客観的視点を取り入れることに

よって、さらにレベルの高い内容に仕上げていきます。講義やチュートリアルだけでなく、クラウドでそれぞれの論文を見られるようにしており、得られた指摘や感想を元に論文の中身を充実させていきます。そして完成後はクラスメートや担当教員から客観的に評価してもらうとともに、自分自身でも自己評価（振り返り）を行います。教員は「論文作成のプロセスが理解できたかどうか」を軸に評価します。書くことはコミュニケーション手段であると同時に考えること。ELA修了時に英語力のみならず批判的思考力がどれだけ身に付いたかがポイントになると考えています。



プレゼンテーション 4

学びを支える Tutorial をどのように行っているのか／宮原 万寿子 ELA 専任講師

チュートリアルは「個人指導」と一般的に解釈されますが、私たちはこれに「サポート」と「自律」を加えた、3つのキーワードから成り立っているものだと考えています。ELAは精読のRCA (Reading & Content Analysis) と、多読のARW (Academic Reading & Writing) という2つのコア科目があり、チュートリアルはそれぞれの科目で学生のニーズに合わせて行われます。

RCAではトピックに関する講義を受け、読解資料を精読し、要点の見つけ方、著者の論点の展開の仕方、キーワードの定義、例の選び方などを分析する方法を学びます。さらに、要点を自分の言葉に置き換えるパラフレーズやサマリーなどの練習を通して、正確に読み書きをする訓練を行います。ただ、学生の英語能力は千差万別で、皆が正確に読み書きができるわけではありませんので、一人ひとりの状況やニーズに対応したサポートをチュートリアルで行います。原則としてチュートリアルは英語で実施しますが、学生によっては使用言語を日本語か英語かを選択してもらうケースもあります。これは英語に自信がない、あるいは英語がわからない学生に、英語でチュートリアルを行っても効果がないと思われるからです。一方、ARWでは、英語圏の学生が読む教材を読み、英語の授業を受け、英語で討論し、自分なりの解釈・意見をまとめ、論文にしていきます。自ら学ぶ姿勢を育むとともに、批判的思考能力を伸ばすことに重点を置いています。ここでも、一連の作業がスムーズに行われるとは限りません。学生は自分の理解度や進度をみて、チュートリアルを受けます。

チュートリアルはこのように「個人指導」と「サポート」という2つの役目がありますが、もう1つ、重要な機能があり、それが、「自律した学習者の育成」です。ここでの自律とは「自分の学習に責任をもつことができる」ということ。いわゆる、自ら学ぶ姿勢を作り出すということです。ゆえに、チュートリアルは学生がわからないところを質問する機会ですが、教員はすぐに解答を与えるのではなく、学生との会話を通して思考の過程を鍛え、考えるように促し、学生自らが解決策を導き出すように誘導します。たとえば論文のテーマが絞り込まれていない場合は、どのように絞り込んでいくかを手助けし、また、論文の展開や表現に問題がある場合は、何が問題なのかを考え、気付かせるようにします。あくまでも強制ではなく、学生自身が自ら相談に出向き、問題の所在・解決策を考えるようにすることを徹底しています。

学生からは教材や論文に関わることに以外に、「先生の英語が早すぎて聞き取れない」「クラスメートの英語力についていけない自信がない」「ディスカッションに上手く参加できない」「自分の言いたいことが英語で十分に言えない」など、さまざまな質問が寄せられます。いずれの場合にも共通するのは、教員が主導権を握るのではなく、学生が主体となること。学びは生涯続くものであるからこそ、自ら学ぶ姿勢を身に付けるようにしています。

チュートリアルは1対1の対話を通して多角的な視点や異なる価値観を知ったり、自己を見つめ直したり、批判的思考を養い、自分の課題を客観的に見る力を身に付けたり、生涯にわたり学び続ける姿勢を習得する基盤を創る効果があるものだと考えています。



プレゼンテーション 5

Wコースについて

—専修分野に特化したアカデミックライティング— / 深尾 暁子 ELA 課程
准教授

WコースはELAを修了した学生を対象とした科目です。ELAを修了した学生は、「英語で開講される講義を受ける能力がある」「アカデミックな論文が書ける」と見なされます。ただ、「英語で書ける」といっても、それは一般的なアカデミックライティングの域を出るものではありません。そこで基礎のアカデミックライティングの先にある、専修分野に沿ったライティング作法の習得を目的として2012年に設置（開始は2013年度から）されたのが「Wコース」です。Wコースの「W」はWritingの「W」。ELAと卒業論文をつなぐWコースの設置によって、学生が「4年間にわたり英語によるアカデミックライティング能力を伸ばし続けることができる」カリキュラムが構築されたことになります。

初年度の2013年度は「歴史学」「文学」「心理学」、翌2014年度にはこれらに加えて「言語学」「経済学」「哲学」の科目をWコースとして開講しました。学生は内容の学習をしながら、それぞれの分野でのアカデミックライティングの特徴を学び、実際に課題に取り組むことでその理解を実践につなげます。授業では教員から専修分野でのライティングについての指導を受け、実際の例や気を付けるべきチェックリストなどを活用しながら課題作成をします。さらに、授業外では必要に応じて、Wコース専属のライティングチューターからサポートを受けながら課題に取り組むことができるようになっています。

学生へのサポートに加え、Wコース担当教員へのサポートも充実しています。ELA担当経験のあるライティング専門の教員が教材作成などの支援を行い、一般的なアカデミックライティングから専修分野に特化したアカデミックライティングへの橋渡しに必要な学習内容について話し合いを重ねながら教材作成が行われています。また、教員の求めるライティングを理解したライティング専門の教員がライティングチューターに対する指導を行うことで、よりきめ細かいサポートが可能になっています。

Wコースを2年間開講して見えてきた成果と課題があります。ライティングに対するモチベーションが上がり、自信を深めた学生がいること、より有効なライティング指導ができるようになったと感じる教員がいることが大きな成果です。一方、ライティングチューターの利用率をさらに高めていくことやライティング指導のための更なるサポートの充実などの課題があります。学生のアカ



デミクライティング力を4年間を通して涵養していくために、さらなる試みを続けて行く予定です。

<パネルディスカッション>

ELA で学んで

ELA 指導担当教員のプレゼンテーションの後、実際に ELA (旧 ELP) を受講した在学生・卒業生によるパネルディスカッションを行いました。森本あんり副学長の司会のもと、ELA (旧 ELP) で英語を学んだ感想や得られた成果について語り合ってもらいました。

注：ELA は ELP(English Language Program) を発展させ、2012 年度より開始しました。

パネラー

渡貫 諒 学士修士5年プログラムにて修士を取得／社会科学研究所助手

森 由樹子 修士2年／ELA ティーチングアシスタント

秋山 肇 教養学部4年／2013年「第29回佐藤栄作賞」国際論文コンテストにおいて優秀賞を受賞

丹波 小桃 教養学部2年／1年次に夏期海外英語研修 (SEA) でダブリン大学へ

司会 森本あんり副学長

○「ICU で学ぶ」意味とは何か

森本 「英語の習得」が目標なら、英語専門学校に進学すればよいし、英語圏の大学に行けばいいはず。また、本学と同様に英語のみを使って授業を行う大学も日本国内で増えています。「ICU で学ぶ」ことの意味はどこにあるのでしょうか。

秋山 ICU の英語教育には「リベラルアーツ、すなわち学術活動のための英語教育」と



Dialogue

Creating the Next 60 Years

いう強い信念を感じます。英語のスキル向上だけでなく、クリティカルシンキングなどアカデミックなことを英語でできるようになる。その目的で英語教育を行っているところに ICU の英語教育の意味があると思います。

丹波 ELA Reader (ELA 教材) では、文化や生命倫理などの教材を読みます。私はもともと文系ですが、ELA Reader でこの分野に興味を持ち、今年度は生命科学の授業を履修しました。振り返ってみると、ICU で学びを深めていくための力を身に付ける 1 年間であったように感じています。

○英語は思考にどのような影響を与えるのか

森本 英語で物事を伝える訓練をするのが ELA なのですが、みなさんが物事を考える時に英語は影響するののかについて意見を聞いてみたいと思います。

秋山 言語には「物の見方」が含まれていると思います。異なる言語を学ぶことは違う世界に視野を広げることであるし、その結果として感性を豊かにすることだと思います。

丹波 私が生活をしている学生寮には、さまざまな国・地域の外国人留学生が数多くいます。彼女たちと英語でコミュニケーションを取ると、距離が縮まります。その一方で帰省して地元の友人たちと話をすると、同じ日本語を使っているのに違和感を覚えることがよくあります。クリティカルシンキングをたたきこまれたせい、楽しい話でも、つい突き詰めて考えてしまいます。

森本 それは ELA を通して、物事を明晰にする訓練がなされたのではないのでしょうか。日本の社会で「英語でものを考える」とは、違う考え方のフレームワーク(枠組み)を持っている、ということ。相手の言葉の枠組みで翻訳する必要があります。友人との話に違和感があるのは勉強の過程にあるからだだと思います。

森 私自身も、英語を使うことで考え方の枠組みに変化があると感じます。ひとつには、やはり ELP で鍛えられたことで英語がロジカルシンキングやクリティカルシンキングといったアカデミックな思考のための言語になっていることがあります。他にも、私にとって英語が母語ではなく、また日本語とも離れた言語体系にあるので、英語を自己表現の手段というよりは単なる思考の伝達手段として、より記号的に扱っていると感じます。私の場合、英語で書かれている ELP リーダーを読んでいるときに、より客観的に文章を捉えていたのは、考え方の枠組みの他に英語に対する言語的、心理的な距離も関係していたと思います。

○英語を学ぶことによって得られるもの

森本 みなさんの話を聞くと英語の学習が物事を考える力を養うことは共通していますが、第 2・第 3 言語を習得するには大きな苦勞を伴います。その苦勞をムダと考えるか、

Dialogue

Creating the Next 60 Years

自分が理解し、人に伝えたいことをクリアにするための時間と見るか。一般的にICUの学生は「英語が得意」と見られがちですが、実はそうでもありません。みなさんはどうでしたか？

綿貫 在学中にたまたま外国人の先生の授業を受けたら面白かったから、その先生についていこうと思ったことが英語の上達につながったのだと思います。

秋山 私の場合は国際関係に興味があり、ICUでは各種の地域機構について研究しています。地域機構の中でも、例えばヨーロッパ連合（EU）は日本語の研究が数多くありますが、私の研究しているアフリカ連合（AU）などに関しては日本語の文献は少ないので、英語の文献を読むしかない。私にとって英語はツールとして非常に重要でしたね。

森本 専門研究のために英語のスキルが必要だった、ということですね。物事を批判的、あるいは論理的に考えるには、違った物の考え方に出会うことが大事。「1つの言語しか知らない人は言語について何も知らない」と言われるほどです。自分が当然だと思っていることも、違う言語の文化の人に通じず、それに驚いて「違う考え方の人がいる」ということに気が付く。これはリベラルアーツの大事な部分でもあるのです。

<聴講者との質疑応答>

質問1 ELAは批判的思考力や問題解決能力を育むものであると思います。インターナショナルバカロレアと共通する点があるようですが、この点も意識したのでしょうか？

田谷 事務局長 ICUでは留学生の受け入れに関してインターナショナルバカロレアの成績を評価しています。インターナショナルバカロレアとICUの理念は共通していると聞いていますが、ELAのカリキュラム編成に関してすり合わせを行ったことはありません。

質問2 ELAのクラス分けはTOEFLを使っているそうですが、IELTSとの関係性は？

岩田 1年次におけるストリーミング（習熟度別クラス編成）の判断材料の一つにTOEFL ITPの成績を用いています。IELTSは個別面接や筆記試験もあり、英語力を測るにはよい指標ですが、バンドスコア（注：階級で評価する方式。IELTSは9段階で評価する）ため、入学時のストリーミングには適さないと考えています。ただ、世界標準の指標ですから積極的に受験を推進していこうと考えています。



質問3 ICUでは1年次に英語を徹底的に学んでいますが、学生たちは「早く専門を学びたいのに」と不満に思っていないのでしょうか。また、先生方がオーバーワークになっているように見受けられますが、先生方に不満はないのでしょうか。

秋山 ELPでは多様かつ高度な内容を扱います。私の場合は国際関係に関心がありましたが、ELPで学んでいくと興味がどんどん広がっていくことに面白さを感じました。また1年次にELP Readerで「人間の安全保障」の専門的な論文を読み、それが後の専門研究にも大きく役立ちました。

丹波 ICUはリベラルアーツの学校だと聞いており、それを前提に入学したので不満は感じませんでした。私は将来、「途上国に関わることがしたい」と思っていました。具体的な何をやりたいのかが決まっていませんでした。だからICUでさまざまなことを学び、やりたいことが見つかればいいな、と思っていました。ELAで様々な分野に触れてみると新しい知識が得られ、さらに知的探究心が刺激されたと感じています。

森本 18歳で将来のことが決められないのは当たり前だと思います。大学の授業に接して将来の道を探せばよいのです。リベラルアーツを学んだ上で専門の道に進む。これがあるべき姿だと感じています。

Dialogue

Creating the Next 60 Years

渡邊(金) ELA Reader で扱う教材はかなり高度なもの。専門外のものも多く、教員の中でも事前に勉強会を行っています。学生から求められる「教育の質」が高いため、事前に予習することが欠かせません。オーバーワークではあるのですが、毎年新しい視点で教材を読み、学びを構築すること、それをいかに学生たちの学びにつなげていくかが教員のモチベーションにつながっていると思います。

質問 4 中には ELA についていけない学生もいると思いますが。

岩田 確かにご指摘の通り、ついていけない学生が何人かはいます。単に「朝起きられない」というものから「コミュニケーションを取るのが苦手」「課題がこなせきれずに授業を休む」など、多様な問題が複雑に絡み合っています。簡単に解決できる問題ではないのですが、カウンセリングをはじめ日々さまざまな方法を試し、少しでも脱落する学生が出ないように努めています。

森本 以上、パネラーのみなさんに ELA に対する思いを語っていただくとともに、聴講のみなさんからの質問にも答えていただきました。ICU はこのほど平成 26 年度文部科学省「スーパーグローバル大学等事業 スーパーグローバル大学創成支援」に採択されましたが、グローバル人材の育成は私たち ICU に限らず、教育機関共通の課題であると思います。ご来場のみなさんには、今日のシンポジウムを通して英語教育に関して何らかのヒントを得ていただいたのではないかと考えています。本日はありがとうございました。